

一九七七年一月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)37714649 FAX(03)29915367
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

購読料 月額500円 6ヵ月前納制

〈もくじ〉

■ 巻頭言 ■

米「合同軍」と日本の支援……………	2
「安保三〇年」と現代……………	3
職場は労働強化に「悲鳴」とウメキ……………	6
—— 組合大会前半の傾向から ——……………	9
「国鉄闘争」の新たな局面と明示……………	12
—— 国労大会の要旨と感想 ——……………	13
資料 自治労が中労委に要請書……………	18
“アリだって巨象をも倒す”……………	5
—— 「国労闘争団」全国オルグに参加して ——……………	18
「党建協」、三周年記念シンポジウムにご参加を……………	5
読者からのおたより……………	18

旬刊 社会通信

NO. 448

一九九〇年九月一日

一九九〇年九月一日発行
毎月一日・十一日・二十三日三回発行

■ 巻頭言 ■

米「合同軍」と日本の支援

憲法理念の実現が社会党の課題

一九八九年、第二次世界大戦後につくられた世界政治構造が転換した。米・ソ協調、冷戦構造の終焉がそれだ。「平和の時代到来」と、これを高く評価する論評が多かった。そこに突然イラクによるクウェート併合、米軍のサウジ派兵である。

イラクの行動も異常だが、米のイラク制裁を口実とするサウジへの派兵は、もともと異常だ。八月末には陸軍・海兵隊合わせて六万五千人の地上兵力が到着し、二百機以上の空軍機と空母四隻、戦艦一隻を含む約五十隻の米艦隊がペルシャ湾、アラビア海北部、東地中海に展開。九月末には総兵力は十五万以上、一日あたり戦費は十億ドルにのぼるといふ。ベトナム戦争にも匹敵する軍事行動だ。この事件は日本にも「戦後外交の転換点」にもなる衝撃を与えつつある。軍拡と憲法と矛盾が飽和点にあることがその大きな背景だ。

自民党内には米軍支援ですでに改憲発言が相次いだ。たとえば「どうせやらなきゃいけないのなら、憲法改正を含め法制の大改革を考え、将来に向けて広い範囲のことをできるようにすべき」(藤尾・元文相)、「中期的問題として、憲法の問題を含めて取り組まなければならぬ」とすれば、それも避けて通れない(西岡総務会長)というもの。これは二八日の自民党総務会での主な発言だが、二七日には小沢幹事長が「現行憲法下でも自衛隊の海外派兵は可能」と憲法の平和的原則をふみにじる解釈改憲の立場を表明したほか、金丸元副総理も「憲法が」悪ければ直したらいい」と、憲法の明文「改正」をふくめて検討すべきと述べた。

今回の新しさは、いわゆる「人質」問題だ。イラク在留日本人は四百四十九人。ジャーナリズムは約二十人が拉致(らち)され所在不明とあおりたてる。この問題で自民党が社会党に揺さぶりをかけてくるだろうことは、すでに自民党の加藤政調会長が二七日、野党五党の政審会長らとの会談で、「人質に危険が及んだ場合にも、(自衛隊を)派遣しなくいいのか。批判するだけでなく、よく考えてもらいたい」と発言していることにも明らかだ。

自民党内のこうした議論のすえ、政府は二九日、「中東における平和回復運動にかかわる我が国の貢献策」をまとめた。全体の構成は「湾岸地域における平和回復活動に対する協力」と「中東関係国に対する支援」の二部門。その骨子は前者が、(1)民間航空機・船舶の借り上げによる食糧・水・医薬品等の輸送、(2)妨害、水の確保面での資機材の提供、(3)百人をめどとした医療団の派遣、(4)各国が借り上げる航空機・船舶の経費等への資金協力。後者が、(1)ヨルダン、トルコ、エジプトなど周辺諸国への資金援助、(2)ヨルダンの難民支援のための一千万ドルの援助というもの。「後方支援」を旨としているが、約十億ドルに上る。

海部首相は多国籍軍への資金援助が支援策にもりこまれたことについて、「資金援助は武力ではない。国連決議に従った。各国の平和を守るための活動に対し、日本のできることはその費用を分担することだ」と、今後、憲法論議として国会で浮上するだろう「集団自衛権行使」に抵触しないとの認識を示した。もう一つの特徴は「国連平和協力法」の制定を検討課題にあげたことだ。また、自衛隊法の改正については、「自衛隊を海外に派遣することは考えていない」としながら、「何が憲法の枠内で許されることか真剣に議論していく」と含みを残している。

現在、中東は戦争状況。「後方支援」なく戦争政策は遂行不可能。憲法が問われる。それは社会党の存在意義をも問うことになる。

「安保三〇年」と現代

世界的なデタント（緊張緩和）なかで注目されていた軍事予算は、来年度概算要求では「抑制」していると報道された。政府案で五・八%の伸びを計上しており、増加額二四三〇億円に「抑制」したものである（政府案であると総額約四兆四千億円にのぼることになる）。デタントはどこ吹く風といわんばかりである。

安保論争に変化

かつての安保論争は、米軍の行動に日本がどうまきこまれるか、あるいはどのように支援しようとしているのかが焦点であった。だがいまや膨大な軍事予算にささえられて増強しつづけている自衛隊をどうみるべきかに論点がうつってきている。

「安保三〇年」といわれているが、それは現行安保条約が締結されてからのことで、日米安保条約は一九五一年以来約四〇年間にわたって存在してきている。自衛隊もその前身（警察予備隊）時代をくわえれば約四〇年間の存在ということになる。基地護衛を主任務に「米軍の傭兵」として誕生し、育成されてきた自衛隊が、いまや「アジアの主役」になりかねなくなってきたのである。とはいえ、膨大な兵員、高度で多様な装備、豊富な実戦経験をもち、世界的に展開している米軍との密接な協同が自衛隊の作戦目的の達成を有利にしていくことになる。日米安保条約は、こうした新たな条件のもとでの意味が問われているのである。

これまでと比して今回の安保論争の特徴は、マスコミが一方的にリードしていることであり、また保守派内部から公然と「安保廃棄」が主張されだしたことである。それらはまた反安保闘争の後退、弱体化を反映しているとみるべきであろう。

これまで反安保闘争は多くの労働者、国民を結集して、歴史的な大衆闘争として展開された。とくに一九六〇年には反安保ストという形態で、労働運動と平和運動、生産点と政治を結合して、階級闘争をより高い段階にひきあげたのである。当時から安保に対する態度が保守、革新を区分けしてきた。ところがいまや革新側からも「安保支持」が主張されたりして、保守、革新入り乱れての論争となっているのである。

石原慎太郎元運輸大臣や愛知和男・党国際局長ら自民党幹部も「安保廃棄」を主張しており、保守的立場の学者らも「デタントの時期に安保は不要」といつている。これまでも保守層に安保批判がなかったわけではないが、こんなに各方面から声があがりはじめたのはやはりデタントの進行、日米経済摩擦の激化によって安保が日本の「国益」にそぐわなくなってきたと認識するようになったからであろう。だから彼等は、一方では「自主防衛」、日米友好関係の重視を強調するのである。

見識問われる山口談話

保守派も「動揺」しているこの好機に、社会党がどのような方針を出すのであろうかと期待されたのであるが、「安保廃棄」でもなく「安保堅持」でもない「第三の道の選択」という書記長談話が発表された。「安保条約の積極面を活用・拡大し」「安保条約を政治経済協力、国際協力、緊張緩和と軍縮推進の総合的条約として現実的に適用する」というのである。安保によって軍縮をおこなうというような「政治的手品」には党内の批判がつよ

くて、一応「タナ上げ」になったが、いったん発表された見解は一人歩きするおそれが多分にある。

これまで政府は、条約の推進、日米共同声明、閣議決定とやり方はちがってもほぼ十年間の安保の方向づけを公式に発表してきた。だが今回は九〇年代に入っても、それ以前にも何も方針が出されていない。自衛隊も現行の中期防衛力整備計画は今年度かぎりなのであるが、次期防衛力は具体化していない。一方マスコミの「安保三〇年」論議はにぎやかにおこなわれている。九〇年安保はまるで方向性のないまま推進されているかのようである。

日本（または帝国主義各国）の軍事増強の根拠とされてきた「ソ連脅威論」はしだいに影響をよわめつつあり、欧米ではもはや「時代遅れ」になっている。デタントにもなつて欧米では軍事費削減、軍備縮小に向かっている。それ故、こうした時代の流れに逆行して日本が軍拡をつづけていくには相当強力にキャンペーンをはらねばならないのである。いいかえれば、「ソ連脅威」論に匹敵する、あるいはそれを上回るほど「国民的基盤」をもつ世論形成が必要なのである。いまのところその目はたっていないようであるが、「安保三〇年」論議はそれを目的意識的に追究しているのである。

高まる自衛隊の比重

かつて六〇年代安保は「アジア安保」といわれ、七〇年代安保は「アジア・核安保」といわれた。それらは米政府のアジア介入政策、核戦略を支持し、支援することを示していた。八〇年代安保は、七八年十一月の閣議決定「日米防衛協力のための方針」によって方向づけられ、自衛隊の主体的活動が強調された。七〇年代における最新鋭装備の大量配備が、そのような自衛隊の新たな任務の遂行を保障していた。

いま、軍事費の削減、軍事方針の変化にともない在日米軍やアジア各地の米軍の部分的、漸次的撤退が始まっている。こうした兵力減少がそのまま軍事力の弱体化につながるわけではないが、やはり自衛隊の相対的比重は高まっていくであろう。アジア各国（社会主義国をふくめて）では多くの政治的不安定要因をかかえており、しばしば政治的対立は武力対立に転化している。日本独占資本はこの地域に多大の権益を保有していて、つよい関心をもってみつめている。「独占資本の傭兵」としての自衛隊が、アジア諸国に対してどの程度「にらみ」をさかせるかは、日本およびアジア各国における階級闘争の進展に深くかわっている。

成立しない「専守防衛」

自衛隊の保有する主要装備は、自国内で使用するよりも海外での使用に適しており、装備面でも「専守防衛」というタテ前からはずっと以前から遊離していた。演習の国際化もすすんでおり、日米合同演習、チーム・スピリット（米韓合同演習）との連動、リムパック（環太平洋合同演習）への参加など他国軍との連携、密接化がはかられている。かつては帝国主義軍隊の増強は他帝国主義との緊張をつよめ、しばしば戦争につながった。しかし最近では、帝国主義軍事行動は目的の早期達成をはかり、また他国からの非難を分散するためにも、帝国主義諸国軍（および同盟軍）と共同しておこなうことが多くなっている。

ヨーロッパでの緊張緩和があらゆる政治的立場の人々から歓迎されているのは、軍事費の削減や兵役の軽減ということもあるが、その根底には、ヨーロッパでは核戦争はもろろんのこと非核戦争でも今後おれば、体制の如何をとわずどの国も破滅してしまうだろうという認識が存在している。高度に発達した生産制度は、濃密な通信・交通網、幅濶した

生産・商業・金融網を国中にはりめぐらし、さらに国境をこえて結びあっている。これらの一部が破壊されただけでもその国や関係各国はパニックにおちいるだろうし、核兵器が使用されなくても、それに匹敵する破壊力をもっている最新兵器の応酬は核戦争と同じ結果をもたらすことになる。これらのことは、そのまま日本にもあてはまる。原発の破壊ひとつ考えても全国的な混乱状態が想定されるし、広い大都市圏、分散している原発を軍事力で守ることなどとうてい不可能である。「専守防衛」という考え方が成立しえない時代になっているのである。

帝国主義軍事力が自国防衛に無力であっても、独占資本にとってそれはきわめて有用である。他国への干渉、自国内大衆運動の弾圧に使用できるからである（ヨーロッパでも一方的な軍事介入の可能性は依然のこっていると考えるべきであろう）。本来、帝国主義軍事力はそうした使用目的にそって設置されている。

具体的な闘いを背景に

日本の平和運動は労働者階級、とくに総評を中心にとりくまれてきた。それだけに総評運動の後退、総評解散が、そのまま平和運動の後退、弱体化となってあらわれている。各地で反基地闘争、反自衛隊闘争がとりくまれていたが、それを全国化、統一化するべき中央指導部が確立されていない。米艦載機の超低空訓練に抗議して各地で自治体決議、集会がおこなわれたように、日米安保体制と国民との矛盾はつねにたたかひをひきおこす条件を有している。また昨年参院において防衛二法案が史上はじめて否決されたが、国民的な軍拡批判を野党がとりあげざるをえなくなっているあらわれであろう。

日本社会党内では、一部幹部が自衛隊は認論をのべたり、安保・自衛隊政策の見直しはじまろうとしているが、先般の全国書記長会議でも各県本部、各派からいっせいに書記長談話への批判ができてきているように、下部での反安保・反自衛隊闘争への意欲はつよい。これからの党内議論は具体的なたたかひをふまえて活発化させていかねばならないであろう。

これからの反安保闘争は、六〇年、七〇年安保のような「華やかな」たたかひを想定するのではなく、各地での自然発生的なたたかひや地味だが継続した活動を重視して、地域の労働者、住民と密着した運動を追求していくべきであろう。そのなかから、労働者階級を中心とする平和運動という伝統を再発展させる展望もつかむことができるのである。

(S)

「党建協」、三周年記念シンポジウムにご参加を

「党建協」は結成三周年を記念して、シンポジウムを開く。目的は二つ。一つは党内外から強まる社会党の基本政策を守りぬく方策を討議すること、二つはソ連・東欧型の「社会主義」の混乱と崩壊から日本型社会主義の展望を切り開くことである。

この二つの課題は、同時にわれわれ自身の課題である。本誌の読者の参加を心からよびかけたい。なお、結成三周年記念シンポジウムのテーマは「日本における社会主義の新たな展望」、パネラーは伊藤武彦、鎌倉孝夫、塚本健、山川暁夫の四氏。時間と場所は左記のとおり。

日時・九月二四日(月)午後一時～五時

場所・東京都中央労政会館(飯田橋・セントラルプラザビル十一階)

職場は労働強化に「悲鳴」とウメキ

——組合大会前半の傾向から——

現代日本の「豊かさ」をどうみるかが、労働運動再構築、日本における社会主義への道を確立する焦点となったようだ。本誌の読者諸氏は、労働運動の再編成にかかる困難以上に、ソ連・東欧の社会主義政権崩壊に歯切りしていらつしやるにちがいない。しかもソ連・東欧からのニュースは、官僚主義に起因する生産力の停滞が、先進資本主義国の「豊かさ」に幻想を生んだことを伝えているのだからなおさらだ。

この傾向は、若者、知識人に著るしいことは、彼らが、「日本の経済復興が、わが祖国のモデル」と頻繁に発言。日本のマスコミがこぞつてとりあげていることによっても明らかだ。この意味で、「豊かさ」をどうみるかが、階級闘争の焦点となる。

企業の論理が生活にも

第二次大戦後四五年、日本資本主義はグリムの童話ではないが、「ジャックと豆の木」以上に天空高く舞い上がった。世界資本主義史上、例をみない高成長だ。その成長は、「人間らしさ」をすべて投げ捨て、資本の論理の貫徹以外、なにもでもないことを示す。マルクスやエンゲルスの古典に、「新しさ」を感じるゆえんである。

われわれの生活、とりわけ首都圏労働者の生活は忙しい。首都圏労働者の平均通勤時間は平均で六〇分。年間労働時間は「空超勤」を含めれば二千五百時間にちかい。定年までの全生活が、資本の価値増殖に奉仕させられる。「人間らしさ」を求めるのが労働組合の存立基盤だが、その労働組合が「ジャンゲルの論理」を職場で鼓舞するのだから、「人間らしさ」を求める労働者は、平然と切り捨てられる。

神戸の高校の「校門圧殺事件」は、企業の論理が、学校教育にまでおよんでいることで、せんりすら覚えさせる。このように異常なことが異常として自覚されていない「異常な国」、それが日本であり、それを「モデル」と考えるソ連・東欧の現指導者―多くは知識人―の、資本主義社会の認識の甘さには、ただただあきれれる他はない。

「豊かさ」と労働組合

このような「豊かさ」を影で演出したのが、JCだ。このJCを中心に八〇年代、日本労働運動は再編成され、八九年十一月には官・民統一の新「連合」が生まれた。JCの資本主義観は、「労資運命共同体論」。経営者以上に、資本の神宮として行動することだった。「豊かさ」が、現在問われている。賃金・労働条件、土地・住宅、過労死、金銭勘定、教育、環境、交通戦争等々。資本ですら、あまりの非人間性が価値増殖の障害と化するのではと恐れをいだき、対策を講ぜざるをえないほどだ。

彼らに援助の手をさし伸べるのが連合だ。連合は「平和、幸せ、道ひらく」をコンパスに「ゆとり、豊かさ」をスローガンとする。「ゆとり、豊かさ」は、一見、働らく者の要求を代弁しているかのようにみえる。だが、今日の「豊かさ」が、企業の論理が社会生活の全領域に浸透した結果もたらされたものである以上、さらには連合の中心組合の「労資運命共同体論」によることは明らかなのであるから、連合の方針はなに一つ具体性をもた

ぬことも明らかだ。

連合の方針が総資本の願望以外のなにもでもないことを示すのが、政府・省庁「白書」だ。九〇年版『労働白書』で労働大臣はこう述べる。

「勤労者生活の着実な改善を図り、豊かさやゆとりを実感でき、働きたい、生きがいのある生活を送ることができるようになることは、もとより労働行政にとって重要な課題ですが、こうした状況の中で、その必要性は一層強まってきているといえましよう。『経済白書』も同様だ。『労働白書』以上に、「豊かさ」に切り込んでいる。具体的にはこうである。

「日本経済の効率性、そのシステムの合理性（じつは異常性・筆者）がもたらすもの、また最近のパフォーマンスの良さという成果（これも株価動向に示されるようにその異常性が、価値法則からも修正されつつある・筆者）が一体どこに帰着しているのか、豊かさはいったい本物なのか、ということも問題である。日本経済は見かけ上豊かになったが、その豊かさには実感が伴わない。ことに労働時間の長さ、土地問題、内外価格差が問題であるということはすでに言われて久しい。特に地価の上昇は、分配面にマイナスの影響を及ぼしている。」

政府・省庁「白書」、そして連合の諸文書も、ここに指摘されているゆがんだ「豊かさ」が、資本の論理、それにもとづく企業社会の論理そのものから生まれていることにはいっさいふれようとはしない。官僚が言及しないのは、彼らの階級的人格からもあたりまえのことだが、労働組合である連合が、政府と同じ立場をとることは、許されることではない。

組合員はウメキ

官・民統一の新「連合」下、今年はじめて官公労組合の大会がおこなわれた。その特徴は何か。

イの一番に指摘しなければならないことは、職場組合員から「一組」、「二組」を問わず、労働条件について、怒りをとおこした「ウメキ」「悲鳴」にも似た声が噴出していることだ。

その典型が郵政職場の全通、全郵政大会。全通大会で、「要員不足が慢性化」「要員のともなわぬ時短では超勤がふえるだけ。いったん凍結を」「時短で労働条件が悪化。悪化につながる時短はごめんだ」「物増に見合う要員を本務者の増員で」との意見が、すべての地区本部からだされるのは当然のこと。だが、全通以上に強く中央批判を展開したのが、二組の全郵政だ。「職場はゆとり、豊かさから、とび離れた状況。業務施策は納得しないまま出発し、有効な対策がとられていない。このため退職が多い。重労働、低賃金、悪環境のためだ」。これは東京の意見だが、地方も「東京、大阪も忙しいかもしれないが、九州も忙しい。物増と要員不足で四苦八苦」と九州が攻めれば、北海道も「時短を進めることで、繁忙に拍車。どう運動を構築するのか。最低限の本務者確保は身体をはっても」と呼応する。

この傾向は、すべての組合の特徴だ。鉄では八八年以降、死亡災害が続出。八八年には二八人、八九年には三〇人、九〇年には六月までに七人が死亡している。八千万トン体制の人員で一億トン超を生産する当然の結果。安全特別月間が延々とつづく。

電機では、「いかにも九〇春闘での賃上げが低すぎたのでは」との論議が相次いだ。職

場組合員が代議員となる率が少ない電機ならではの本部批判だ。だが、批判の矢面から委員長が選出されるのが、電機の体質。組合の「ペレストロイカ」にはまだ時間がかかるということか。

政権構想では競い合いも

二番目は、労働組合の存立基盤である労働条件問題をさておいて、政治論議がかしましかったことだ。全通委員長は、「社、民、連三党の解体、再編成」を主張。全電通では連合会長でもある委員長が、「社民勢力の大同団結とは、社、民、連三党の解党、再編をイメージしたのではない」と応しゅう。

電機ではいつものように、野党党首が結集したが、その発言はバラバラ。野党の解党・再編が夢のまた夢であることを暴露した。

中東の新たな事件で日本がアメリカの提唱する合同軍、国連のイラク制裁軍参加の決断をせまられることは必至。来年四月には統一地方選挙が控えている。田辺氏は山口・土井両氏にとって代わりたい意向のようだが、田辺氏流の親金丸路線で社会党が地方選挙で勝利できるか。これは百%不可能。「社会新報」がイメージ・チェンジするように、社会党の体質改悪推進は、田辺氏が考えるほど容易ではあるまい。もし田辺氏流に社会党が改悪された場合、社会党以外に票を投じたことのない小生ですら、社会党への一票を考えざるをえないからだ。この時、過去数十年、自民党に投票しつづけながら、参院選、都議選、衆院選で社会党に清水の舞台からとびおりの心境で投票した人びとの票は、二度と社会党に投ぜられることはあるまい。

次々と路線転換へ

第三は、旧総評官公労の自粛が予想以上にはげしいことだ。日教組は「参加・提言・改革」をかかげ、全通は従来のスタイルを全面改悪、「連帯、協調、統一」をスローガンに、制度・政策闘争を政策・制度闘争へと言葉の上でも連合に協調、国民春闘も名実ともに消えた。全電通は「参加・創造・躍進」だそうである。

全電通に例をとれば、電々公社民営化のとき三〇万三九五一人だった労働者数は、一九八七年に二七万六六五〇人、一九九〇年には二六万人へと減少。現在では二三万人体制が進行中だ。

連合下で旧総評の伝統を堅持してきた私鉄総連も、今年の大会で全国労働組合生産性会議への参加を提案、決定された。また日本一のマンモス組合であり、地域から力を發揮していた自治労は八月末から大会を開くが、「反行革」がスローガンから完全に消えた。

真の豊かさへの道

冒頭述べたように、「真の豊かさ」を求めるなら、企業社会の論理を拒否することが必要だ。この姿勢と堅持してこそ、連合内で階級的労働運動構築の努力が結実することが忘れられてはなるまい。

世界の情勢はわれわれの予測をこえるスピードで動いている。それが国内情勢にハネ返ることは必至。困難ではあるが、歴史を実感させる楽しい時代に入ったことを活動の糧(か)に、ともに全力をつくし合う。それをわれわれの相言葉としたい。

「国鉄闘争」の新たな局面を明示

——国労大会の要旨と感想——

国労第五五回定期全国大会は、八月二日・三日の両日にわたり、品川区立総合区民会館において開催された。今回の大会の課題は、まず第一に、一〇四七名の仲間の解雇撤回、第二に、JR職場における劣悪な労働条件の改善に向けた体制を確立し、国労組織の強化・拡大をかちとることであった。暑い日が続く東京での大会にもかかわらず、大会会場は何となく、さめた(?) 雰囲気がただよっていた。いつもの国労全国大会のような熱気が感じられない。それは、各地方、支部の指導部を含め、我々自身が、国労運動自体を、何か懐疑的な目でみていることのあらわれではないかとさえ思われた。

しかし、大会が始まり、論議が始まると、様相が少し変わった。大会代議員一人一人の発言はそれぞれに、今年三月までの闘いを一区切りとし、そこでの総括を徹底しながら、新たな闘いを、みずからおかれてある現状の中からどう展開していくか、というものである。そこには職場の活動家一人一人の苦悩がにじみ出ている。

国労は生きていた。各職場に国労の運動は根づいていた。この部隊がいるかぎり、この構え、この運動があるかぎり、国労は消えることはない——あらためて確信した大会であった。問題はこれらの運動をどう重ね、大きなうねりとしていくかである。それは、本部の指導性も含め、これからの我々の課題でもある。

以下、今全国大会の要旨と感想である。全国大会を前後して、国労をめぐる様々な動向があったが、はたして、それはどのような意味をもっていたのか。それ以降の国労の進むべき道は、そして展望は……。今こそわれわれ一人一人が、「なぜ国労なのか」をあらためて問いなおす時なのかもしれない。

〈この間の国鉄闘争の総括を徹底し、新たな局面へ〉

書記長集約は第四四七号の資料を参照していただくことにして、こうした書記長集約の背景にある各代議員の主な発言を列挙する。

- ☐三月闘争の総括の徹底が重要。率直にいつて我々の力不足。長期闘争の構えがまだ不十分だ。
- ☐国鉄闘争全般にわたる抜本的総括を行う時。国労が残ったことが、敵にとっても、我々にとっても決定的なことだ。
- ☐闘うための財政づくり、全国的な体制づくりをやりきるかどうかだ。共同行動、共闘に対する本部の指導に積極性が欠けていた。
- ☐労働そのものがきつくなってきた。夜間作業も、二種類の作業がセットで出されてきている。昼間帯では、とても間合い設定ができなくなってきた。作業も個々人に責任が負わされてきている。本部も、各地本に足をはこびながら実態をつかんでもらいたい。
- ☐青年部の強化・育成は非常に大事になってきている。新規採用を組織していくうえで、本部青年部の専従枠をはずすという事は非常に問題がある。

- ☐ 闘争団として、しっかりとした生活体制を確立していく。長期に耐える体制を確立しつつある。冬を越せないと考えているところは北海道では一つもない。
- ☐ 中労委の態度は犯罪行為だ。徹底した責任追及を。
- ☐ 解決水準の問題で、一定の判断をする時は、組織的に、全体の意思統一する場を設定してもらいたい。
- ☐ 息の抜けない職場実態になっている。しかし職場では、国労に対する期待感も高まっている。本務職場の闘いがなければダメだ。全国単一組織としての統一対応を！
- ☐ 労働条件の闘いは、まず分会機関の活性化が基本になってくる。
- ☐ ヤミ、カラ攻撃以降の闘いの総括を徹底し、産別単一体としてふさわしい体制確立を！
- ☐ 職場に來ても何も展望がない職場実態だ。自らの労働条件は自らの闘いで取っていくしかない。本部はもっと職場に入ってもらいたい。
- ☐ 書記局の削減は一方的に実施することなく、将来展望を明らかにしてもらいたい
- ☐ 自活体制の確立は、九州全体としてもできた。八月からは無収入の中での闘いになる。勝利するために、いろいろな団体の力を借りる必要がある。
- ☐ 三月闘争以降、運動が後退している。気分的な運動に流された結果ではないか。解決を急ぐことはない。闘い抜く体制づくりを確立することだ。闘争団の生活援助カンパは、任意ではなく、義務カンパにすべきだ。
- ☐ 組織検討委員会の内容で、長期闘争に耐えうる組織づくりできるかどうか。少なくとも次の点を要望したい。①書記労とはキチッと団交を行う。②議論の時間を保障する。③資産活用 of 公開。
- ☐ 闘争団の自活体制はほぼ整う。問題は、本隊の闘う体制だ。
- ☐ 単なる正義感だけでは闘いきれない条件がある。最初のストは返上せざるをえなかった。本場の分会運動の出発点はここから始った。今の扱われ様を常に討論し、怒りを継続することが重要だ。
- ☐ 国労の書記局削減は闘争体制を弱めることになる。
- ☐ 本務の闘いが充分でないかぎり、事業団闘争団等ともつながらない。
- ☐ 出費をおさえる努力を家族と共に行っている。組織的自活体制の確立が急務だ。

〈国労運動の新たな質的転換へ!〉

今全国大会で何が明らかになったのか。それは第一に、国労運動の新たな質的転換が始まりつつあるということである。もちろん、その質的転換を、主体の側がどのように意識し、どのような方向で行おうとしているのかは、まだ総体としては不鮮明である。しかし、確実にそれが求められているし、始まっているということである。闘争団の仲間の長期闘争に備えた自活体制の確立と、それに向けた意思統一、さらにそれをつつみ、闘いを拡大すべくJR職場での様々な苦闘等々―まさに、闘争団の闘いと、JR職場との闘いを、別々のものではなく、一体のものとして総体がとらえつつあるということである。だからこそ今大会は、言葉だけではなく、われわれ一人一人の身に、スッシリとその任務の重さのしかかっていたからこそ重苦しい雰囲気はただよっていたのである。まさに生み

の苦しみともいべきものである。

第二に、しかしながら、指導部の構えの不充分さを感じたのも今大会である。二〇万人組織時代のしがらみ、発想をすてさるところから、これ以降の国労運動は始まるのだが、あまりにも紋切り型、型にはまった答弁が多かったのではないか。たとえば、新規採用対策を含む青年労働者対策にかかわる青年部の専従問題である。単に財政上の問題からのみの「御理解を」だけではすまない。運動との関連、将来展望からいつてどうなのかという点を含めて、代議員の発言を受け止めるべきであろう。さすがに、書記長集約では、この問題に関し、「考慮する」となった。

第三に、第二の点とも関連するが、何をもって、長期に闘う体制を確立するのかということである。長期に闘う体制とは、勝利に向けた具体的な展望、道筋を明らかにし、それに向けての戦略、戦術、組織方針を確立することである。

大会では、「中労委への過大な期待」をいなく、「解決水準」を下げることに懸念が出された。当然である。闘いの基本は、まず自力で闘い抜く構え、体制を確立することである。それを確立しえてはじめて、闘いの拡がりと、第三者機関をまきこみ、敵の譲歩をも引き出すことを可能ならしめるのである。そうした意味で、今大会で、それをつくり出すことができたのか。

闘争団の意思統一は、大会で聞くかぎり、かなり進んでいる。家族をも含め、自活に向けた体制づくりが進んでいる。問題は、JR内の本務職場である。本務職場で確実に進む労働条件の悪化は、労働者の肉体ばかりでなく、労働者の精神をもむしばんでいる。「何も考えたくない」と、みずから考えることをやめるか、あるいは、自己解決に走る労働者もいる。ある意味では当然なのかもしれない。考えれば考えるほど、展望のない、絶望的な現実突きあたるのだから…。

しからば、我々は何をするのか。再度、根気強く、職場から労働運動を構築していく以外にはない。分会機関の活性化、職場労働者の要求の組織化等、労働運動の基本的なことを、根気強く、くり返して行う以外にはない。そして、本務職場の労働者の意識を少しでも引き上げることに全力を上げることである。

第四に、書記局体制の問題が議論になったのも、今大会の大きな特徴である。書記の大幅な削減にともない、これ以降の本格的な闘いを組織しきれられるのか、ということである。確かに、書記削減は、財政問題では一定理解できるとしても、運動的には明らかに後退である。問題は、一時的に後退したとしても、可及的すみやかに、それを穴うめし、同様な水準での運動を展開しきれ体制を確立できるかである。

今までのような国労の対応ではまったく話にならない。何度も言うように、二〇万人組織時代の発想を払拭し、指導部（本部、地本、支部を問わず）自らが職場に足をはこび、書記局の穴をうめるべく、組合員総体が組合業務に積極的にかかわるような体制を、早急に確立することである。さらに書記局との間で、相互に議論をつくし、相互の信頼関係のうえに実施していかなければならないのは、当然のことである。

第五は、地域共闘の問題である。この問題では、革同系の、ほとんどの代議員から、内では全動労、外では全労連との共闘を積極的にすべきだとする意見が出された。共闘一般

を否定するものではないが、あくまでも慎重に、である。

一方の共闘が、他方の共闘を出来なくしたり制限したり、あるいは自らの運動の幅を結果としてせばめたりすることは、今の国労にとってはマイナスである。当面、我々は、運動の幅と厚みを増すこと―労働運動ばかりでなく市民運動との連携をも積極的にすすめること等々―を目的意識的に追求しなければならない。

〈国鉄闘争勝利に向け、一人一人の方針確立を!〉

大会での感想を一言で言うと、国労運動の質的な転換に向けた新たな局面が展開しつつあるということ、それに向けた苦闘がすでに始まっているということである。「大国主義」「官僚主義」「企業主義」―等々、今までの国労がもつあらゆる弱さ、体質を、自からが変えようとしなにかぎり、否、変えないかぎり、国鉄闘争の発展も勝利ものぞめないことを、はからずも示した大会でもあった。

闘い、勝ち抜くのは、けっして容易ではない。しかし、肩ひじをはる必要もない。現状を正確に把握し、あくまでもその流れの中に「自然に」である。闘いは、みずからおかれている現実、条件から出発する以外にないのだから。

(M・M)

資料 自治労が中労委に要請書

一九九〇年八月一日

中央労働委員会 会長 石川吉右衛門 殿

旧国鉄の分割民営化に伴う「再就職促進特別措置法」の期限切れを理由に、国鉄清算事業団職員一、〇四七名が本年三月三十一日をもって解雇されました。国の政策遂行の過程で、このような大量な者が雇用を失うという事態は、重大な社会問題と言わざるを得ません。

また、旧国鉄職員がJR各社に採用を拒否された問題について、この間各地方労働委員会より救済命令が出され、現在中央労働委員会において問題解決の努力が続けられています。雇用が継続されなのまま放置されていることは、労働組合としては重大な問題であり看過できないと考えます。

自治労は雇用確保を重視して、この間九、六一五人の旧国鉄職員の地方自治体等への採用について、その受入れに努力してまいりました。私どもは、この問題を「人権問題であり、雇用問題である」との立場から、貴職のこれまでのご努力に敬意を表しつつ、さらに問題解決をはかられるよう、下記の通り要請します。

記

JR各社に採用を拒否された旧国鉄職員の問題に関わる地方労働委員会の救済命令をふまえて、解雇された一、〇四七名の国鉄清算事業団職員の雇用確保を優先させ、早期に問題解決をはかられたい。

以上

「アリだつて巨象をも倒す」

——国労闘争団全国オルグに参加して——

五月一〇日から五月二四日まで、国労全国オルグ団第一陣として、東京南部ブロックを回らせていただきました。

受け入れ責任支部の、国労新橋支部、宿泊でお世話いただいた国労関東自動車支部の皆さん方のあたたかい受け入れ体制により、元気にオルグできたことを、紙面をお借りしまずお礼申しあげます。

南部ブロックには、名寄闘争団二名、音威子府闘争団三名の五名が張り付き、四人は四つの区労協(目黒・港・品川・太田)を一人ずつ担当し、東京闘争団の仲間と共に各地区・単産回り。私は主に新橋支部管内のＪＲ職場を回らせていただきました。

一九八一年暮れからの国労に対する『ヤミ・カラキャンペーン』から一〇年間。私達国労組合員とその家族は、仲間の団結と国労運動の正しさをより所に、多くの地域の仲間からの支援に支えられ、熾烈な攻撃に耐え抜いて闘ってきました。

八七年、分割・民営化が強行され、由なく清算事業団行きが一方向的に通告されました。全国七六〇〇余名、道内約四二〇〇名が三年間の執行猶予付指名解雇をされたのです。

道内国労組合員は二人に一人が、私達が所属する旭川地方管内では実に六五%、一〇人いれば六・五人が否応なしに事業団に入れられました。ある方から言われました。「あなた達の言ってる事はわかるし、思想は立派だと思ふ。しかし、子供や家族まで巻き込んで闘うと言うのは感心しない」と。私は、一晩悩みました。しかし出た結論は、私達が好むと好まざるとにかかわらず、分割・民営化と言う大きな嵐の中に巻き込まれてしまったのだと。誰しも可愛い子や妻を、ドロ沼に好んで巻き込む事はしたくないのだと。

この間の扱われ方が余りにも許せない

本人のみならず、家族・子供までが受けた屈辱や苦悩を、不幸にしてこの世代を生き抜いた労働者として、「許せないものは許せない」と当たり前主張を貫かざるを得なかったのです。

分割・民営化直前に、それまで同じ国労組合員だった者が、雇用不安から路線転換、あるいは分裂して行きました(当時の状況は全国各地同様な状況だったでしょう)。

名寄では、分裂の首謀者が、「俺はあと五人枠を持つて。ＪＲに採用されたかったら国労を抜ける」と触れ回っていました。

私は、当時国労名寄保線区分会の執行委員をしておりましたから、組合員宅を一軒々回つて、「ヤミ・カラ攻撃からずっと頑張ってきた仲間ではないか。参議院での附帯決議でも所属労組別による採用差別は行なわない、そうした不当労働行為が行なわれてはならないと決議されている。俺達は真面目に働いてきたし、決して飛び跳ねた運動だつてしていない。だから自信を持って頑張ろう。ここまできて労働者の魂を売るような事はするまい」とオルグして歩きました。

しかし、この決議は守られませんでした。国労への差別は先に述べた通りですが、一方労働者の魂を資本・当局に売り渡した、現在のＪＲ総連(当時の改革労協)の採用率は

実に九九%だったのです。

私がどうしても許せないのは、雇用不安から分裂したのはまだしも、労働者の首切りは許せないと運動している国労の、組合員・家族の命を賭けた闘いに對し、JR総連は卑劣な政治工作と清算事業団労働者の生首をつなぐような事をするなら、ストライキをもって闘うと言う馬鹿な事を言っていることです。早く首切りを強行せよと威圧的な集会は聞く。呆れ果てて言葉も出ません。労働者の首切りは、組織の総力をあげ阻止するのが労働組合のイロハではなからうか。労働者の魂を売り渡すと、ここまで落ちるのかーと。

名寄の清算事業団雇用対策支所は、ちょうど名寄駅構内が見渡せる駅の裏側に建てられました。年間一千万、三年で三千万円のリース・プレハブです。

私は、この支所の二階の窓から、JRに採用され働いている仲間の姿を、三年間じっと見続けてきました。「何としても俺は元の職場に戻るのだ」こう思い続けてきたのです。

名寄では、最盛期には国鉄職員が約一五〇〇人近くいました。宗谷線、名寄線、深名線を抱え、その時期は「国鉄の街」と称される程でした。それが分割・民営化で、先人が苦労して引いた名寄本線を削がし、時代に逆行するかのような交通体系を、時の政治権力者の胸三寸でガタガタにして行くー赤字だからと言う理由で。残されたものは列車に代わり、高い運賃を強いられるバス路線でした。

暗くて寒い待合い室。トイレも完備されていない所がほとんどです。地方の者は生きる資格がないとでも言うのか！お年寄り、子供、通学生の足を奪い、どんどん住みずらくさせられているのです。名寄市は人口も減り、現在三万二千人を切りました。JRで働く者は約一四〇人、その内国労組合員が四〇名程度です。JR総連は、その国労組合員に對し何と言っていたか。「清算事業団は三月一杯でなくなる。その時はお前たち、ガツチリやらせてもらうぞ」と恫喝をかけ、「国労に残っていると言うことは意識改革がまだ出来ていない証拠だ」と、あいも変わらず脱退策動に狂奔しているのです。私はもう一度元の職場に戻り、そうした策動に動じないで頑張っている仲間たちと働きたいと思っています。三年間の清算事業団での扱われ方、あるいは家族の苦悩は計り知れないものがあります。毎日毎日が自学・自習と言うのも仕事を与えられない、することのない長い一日を過ぎ、三年間という時限立法に、焦りと不安の毎日を送る。ある人はこう言います。「仕事をしないで金をもらえるいい職場だナー」「仕事もしないで金をもらうナマケ者、ムダメシ喰いだ」と。こう言われ、家族は苦しめられたのです。事業団に入れられた者でなければおそらく分らないでしょう。

「分・民」で道北の経済基盤は崩壊

事業団の仲間がある日ポツリと言いました。「一日は長い、しかし一年たつのは早い」。何も仕事を与えられない長い一日に耐え、生活・雇用不安で日々迫る時限立法の雇用期限の重圧を噛みしめる。家へ帰れば親・兄弟・妻からせめられる毎日。もういい加減に就職しろ」と。ある者は精神的な重圧により十二指腸潰瘍になり、ある者は円形脱毛症になり、ある者は不眠を訴えました。「もう事業団に出てくる事が耐えられない」「みんなに悪いけど先に就職するよ」。こう言って再就職をして行った仲間たち。

当初、名寄の清算事業団に収容された数一八〇名、その内約五〇名が再就職して行きました。「こうしたひどい扱われ方は決して忘れまい、新天地へ行って、分割・民営化の

本質を詰め続けよう」「頑張れよ」。固い握手をし、別れました。

名寄では、全国にも稀な事例があります。三年間の中で、当局の斡旋した旭川の旅行代理店、希望を胸に就職したAさんの会社は、入社後一週間で倒産。また和寒の石材会社、ここは職安も太鼓判を押ししている、和寒町も幾らか融資をしている、いい会社に勤められてあんたら良かったなと当局に言われ、就職したBさんとCさんの会社は、勤務後二カ月ももたず倒産しました。

私達は「理由もなく事業団に入れておいて、さらにその中の当局の扱いは余りにもドイではないか」と怒り、当局の斡旋する会社は信用できんぞ、うかうか口車に乗せられると大やけどする」こう実感したのです。

道北の経済基盤は、きわめて脆弱です。昨年暮れに、全国で三万五千件と言われる政府の求人案が示されました。道内約七千件です。自身は民間企業、公的、関連企業、広域の四本柱。皆さん方、きつとそんなに数多く就職口があるのに再就職しないのは、働く意志がなかったからだと思われるのではないかと思います。しかし自身は、民間企業は一〇万〜一五万、ひどいになると七万〜八万というしろものが大半でした。しかも業種的に言うと、常に新聞広告に求人を出しているような会社がほとんどで、新聞広告の切り抜きをほりだすだけの事業団での再就職斡旋、三年間の集大成のようなものです。公的部門は四〇倍、五〇倍の狭き門。家族、親戚から責められ、受け続けた人もいます。しかし、落ち続け、結果として現在闘争団にいる方もいます。

データラメだった職業紹介

こんな事例もありました。秋田の労働基準監督署。ここは募集枠一名。ここに名寄の仲間が一名応募しました。地元同居している病弱な親とも相談し、一大決心をし受験したのです。全国から彼を除き、誰も応募しませんでした。競争率ゼロ倍。誰しも受かると思っていました。受験後、当局の所にも秋田の方から「あんな優秀な職員がまだ残っているのか」との電話もあり、「まず間違いない」とも言われておりました。しかし結果として彼は、面接で落とされたんです。関連企業はさらにひどいものでした。年収一二〇万円なんです。これでは年金併用でない、とてもじゃないが食って行けない。当時の事業団の平均年齢は三七歳位です。年金資格をもっていない人が大半なんです。

広域異動。分割・民営時の振り分けの際も含めると、四回取り組まれました。皆、悩みながら議論しました。眠れない夜を過ごし、嫁サンと喧嘩し、激論も交わしました。ある仲間は、「日高から面倒を見ると親を呼んだ。家を建て、月々五万のローンを親と半分ずつ払っている。広域に同じようと思うがいつ親に話すか」。両親はきつと名寄に残ると言うだろうし……酒の量も増えました。酒の力を借りて、ようやく親を説得し応じたのです。皆、いくらシバレても、雪が降っても住み慣れた北海道がいい。兄弟、親戚のいるこの地で暮らしたい、そう思っていたのです。しかし、私達は余りにも強大な敵を相手に闘っています。味方も少ない。本隊もかろうじて三万六千です。ある者はようやく建てたマイホームを処分し、ある者は親を捨て、ある者は妻や子を残りし単身赴任。生活を守り、闘いの場を求め広域異動に応じました。

むりやり条件をつくらざるを得なかったのです。議論が不十分なまま広域に応じた仲間には、残念ながら何名か国労を脱退しました。議論を尽くせなかった私達の責任です。しか

し、議論して送り出した仲間たちは、みな元気に頑張っています。いくら当局の嫌がらせの意向や、遠距離通勤を強いられても、歯を食いしばり闘っています。

広域問題ではみな悩み

名寄闘争団の各種財源づくりに献身的に協力してくれます。オルグの時も、道案内あるいは宿泊など強い味方です。名寄からは、本州各県に約八〇名の広域部隊が配置されています。原則論では広域議論の正否を問う以前に、私達が今、実感していることは、広域に応じた者も、残った者も、我々を苦しめた、家族を苦しめた強大な敵を倒すこと。敵に勝つこと。の一点に集中されているんです。

では、なぜ残った部隊は広域異動に応じることができなかったのか。正直言って皆悩みました。しかしある者は「若くして家を建てた。家を処分しても残るのは借金ばかり」「年老的な親を残して行くか悩んだが、名寄は豪雪地帯。今まで俺が屋根の雪降ろしをやっていた。俺がいなくなると誰がしてくれるのか」、迷ったが広域は断念した。あるいは親、子供に障害を抱える者など、ほとんどの人がそういう理由で広域を断念したのです。

私の場合、上の子がこの春小学校に入学しました。下の子は四歳です。最後の広域の時、妻に相談しました。「結婚して八年目。分割・民営化で厳しい闘いの連続で、役員を色々やっていたから家をあけることも多かった。おまえには何ひとついい思いもさせてやれなかった。迷惑もかけた。今回の広域は最後の広域と言われている。情勢はこういう旗色だ。もし、お前が行くというなら応じよう。東京の地で闘うことも決意しよう。しかし、お前が残ると言うならこの地に残らざるを得ない仲間と共に、地元を骨を埋め、最後まで闘い抜こう」。

そのとき妻はこう答えました。「お父さん、子供達がここまで大きくなれたのも、はしかだ、風邪だと病気のとき、音威子府のおばあちゃんに来てもらって、一週間、一〇日と見てもらったからだよ。東京に行ったら誰が見てくれるの？ お父さん賃金安いし、私も働かないと食べて行けないでしょ。生活厳しくても頑張って闘おう。お父さん何も悪いことしてないんですよ」「その通りだ」——私はこの地に残り、最後まで闘い抜く決意をしたんです。

私達は、三月の年度内解決に向け、文字どおりあらゆる闘いを組んできました。しかし、残念ながら解決はされませんでした。四月一日付けで、不当・不法にも全国で一〇四七名が解雇されました。道内五二一名、旭川地本二九一名です。私達は四月以降、新たに広域異動された仲間の親の家を借りて、名寄で解雇された仲間三三六名で、「国労名寄闘争団」を結成し闘っています。

闘争資金づくりに全力

賃金は四月で打ち切られ、五月からは九〇日間のみ雇用保険の六割給付。健康保険は会社負担がゼロになり、一人毎月二万前後かかります。国民年金は毎月一人八四〇〇円。奥さんが働いていない人は二倍かかります。

私達は、この間自治労の仲間、あるいは市議会議員など、皆さん方のお力とお知恵を借りて、保育料の減免申請、就学援助金制度の活用、市営住宅料金の減免など支出を極力押さえる、いわゆる事務処理・手続きをして来ました。また、事務局及び専門部体制の確立

を計ると同時に、地域小集団（七班）体制の確立。これは、オルグ等で家を開けたときなどの奥さん方の協力体制・ささえ合いをしつかりする。あわせて、連絡網としての機能も果たします。全国オルグ団の班編成もしました。誰が見ても地元を離れることのできない者を除き、五―七人で、A班からE班まで編成しました。第一陣がオルグに出たときは、生活対策班が、毎日「事務局だより」を持って、闘争団の動きを報告。子供の保育所への送迎なども、仲間が手分けしてやってくれました。

私達は、たとえ生活がくるしくとも「泣き事は言うまい」「自分達の生活と闘争資金は自らが作り出す」事を意志統一し、組織的自活闘争体制に入りました。

闘争資金作りで、朝六時からのゴルフ場の玉拾い、芝植え、農家へのアルバイト、土建、板金、タウンページ配り、廃品回収、クリーニングの取り継ぎ、物販、等々。今後、深夜帯の店舗にも数名派遣します。

敵が兵糧攻めで来ている今日、私達は敵との正面攻防のみが闘いではないと言う事も確認し合わねばならないと思います。

理屈だけでは闘えない。脱落者がでるでしょう。節々の正面攻防も、勿論組み立てつつ生活を守ること、このことが大切だと思います。『国労闘争団』の事務所を構えている事そのものが闘いだと思えます。事務所入居後、一度はJR当局が、一度はJR総連の（分裂策動の首謀者）地元幹部がウロウロと偵察に來ています。

消滅するであろう清算事業団が、闘争団として事務所を構えているだけで、彼らには脅威なのでしょう。

全国オルグで勇気

全国オルグで大変勇気が沸きました。私達がきちんと話せば、党派の別なく、ほとんどの方が話を聞いてくれました。労働者の首きり反対の闘いは、党派を越えて支援が寄せられることを、身を持ってガッチリ体験できたことは、ともすると沈みがちになる国労闘争団の大きな励みになりました。

“打てば響く”国労闘争団の地を這うオルグで、勝利の日まで私達はたとえ苦しくとも「三度の飯を一度にしても」自力転回で闘い抜きたいと思えます。

ヤミ・カラキャンペーンから始まる国労つぶし、そして清算事業団での三年間の扱われ方。国鉄分割・民営化攻撃の中で、自ら生命を絶たざるを得ないほどまで追いつめられ、死んで行った全国百名を越す仲間たち…。生き残った我々は、たとえ殺されようとも最後の一兵まで闘い続けます。

“アリだつて巨象をも倒す”全国各県に散った国労オルグ団は、共に闘ってくれる“アリ”の支援部隊をどんどん拡大するでしょう。

結びに、国労名寄闘争団は五月二六日に「闘争団の花見」を行ないました。作業についている者もいるため、一七時三〇分から“花”なしで、闘争団事務所にて、組合員・家族が多数参加し、和気あいあい。グチも聞いて久々に明るく楽しみました。

本来、闘争団は酒など飲んじゃいけないのですが、多くの仲間からの貰い物？を活用し、家族総ぐるみの団結を固め合うことができました。

道程は厳しくとも、仲間と共に、仲間を信じ、今後とも闘い抜いて行きたいと思えます。

（名寄闘争団事務局長・佐久間誠）

◆読者からのおたより◆

仲間にも励まされ 思想性がないもので、ついつい現状に自信をなくしかねませんが、貴通信で働く者の原則を教えられ、また全国の仲間の活動に励まされながら、日々がんばっています。今後ともよき教宣を。
(京都・M)

社民再評価 激動の東欧・ソ連も変化の質や方向がそれなりに定まりつつあるようです。そのほとんどが資本主義の復活を「完了」するようです。この事態をどうみるのが、たいへん難しい問題としておくたのちの前にあるようです。個人的には社会民主主義の再評価しかないと思いつつありますが(社民左派?)、ソ連・東欧の誤りの突っ込んだ分析は膨大な作業になりそうですネ。これまで肯定的評価をしてこられた貴誌にとってはシンドイ悩みですが。健闘を祈ります。
(大阪・M)

編集部より おっしゃるとおりたいへんな事態です。しかし悩んでいてもしょうがありません。まず、ソ連・東欧の人たちが社会主義的計画経済の運営に失敗したことが強調されねばなりません。第二に資本主義は資本主義であり続けていることです。ここから日本的な社会主義を建設する以外にないことです。たいへん興味ある本も出版されています。原野人さんの『日本型社会主義と脱原発』(十月社刊、一四四二円)です。「社民再評価」などとおっしゃらず、この本を読んで科学的社会主義の日本への適応に全力をつくそうではありませんか。

私の近況 現在、国労名寄闘争団(三六名)に籍をおき、闘争団団員としてがんばっています。本年四月、不当にも国鉄より二度目の首切りをされ、雇用保険も七月二〇日で切れ、生活資金、闘争資金づくりに水産加工工場(九〇キロの遠隔地)、板金加工所で汗しています。団員の仕事は土木作業、運搬作業、鉄筋工、鉄工所、夜の仕事(セブンイレブン、パチンコ店、飲食店)、クリーニング、森林組合等です。

一方、運動の組み立ては、全国オルグの他、地域・単産オルグ(南北に七〇キロ、東西二〇キロ)、物販活動を月二回、市内街宣行動もJRの仲間と週二回おこなっています。しかし、名寄地区では冬期の仕事はほとんどありません。いま闘争団では、本州へ出稼ぎとオルグを兼ねて行くことも議論していますが、全員が行くことは不可能なもの事実です。地域オルグ、家庭の事情もあるわけですから。私たちは、長期の組織づくりをしながら、短期解決をめざしがんばっています。全国の仲間のご支援に感謝するとともに、今後もよりいっそうのご支援をお願いします。
(名寄闘争団・竹中憲之)

JR東労組でガンバル 私たち旧動労仙台の仲間は、JR東労組の中では小さな力ですが、各種大会で選挙を闘いながらがんばっています。暑い日が続きますが、編集部のみなさんがんばって下さい。
(福島・Y)

八・一集會に千四百五名 八月一日午後六時から明石市民会館で「がんばれ国労闘争団・ひろがれ連帯・首切りを許さない八・一兵庫集會」が開かれました。主催は国鉄闘争支援兵庫県民会議。とりわけ印象的だったのは、岡崎ひろみ議員が女のネットワークを代表して、「国労家族会も北海道から九州から家族が動き、子供も動き出している。正しく伝えれば人を動かせる。ひろがれ連帯は、ひろげよう連帯です」と力強く訴えられたことです。がんばれ国鉄闘争団!

とり残される日本 民主化のウネリが世界中で起こっている。東欧でネパールで、南米で。社会主義、王政、軍事独裁と国家体制は異なれど。民主主義を求める世界の動きからとり残されるのは日本……。
(山形・S)